

「地球 (Earth) を癒す “農” 」 (『青森 EARTH2019 : いのち耕す場所—農業がひらく
アートの未来』青森県立美術館、2019.10.31) 片岡龍

いまから三百年前、北東北の大地に根ざした思想を生み出した安藤昌益は医者でした。
昌益が癒そうとしたのは、この水惑星である地球 (earth) そのものでした。

古来、アジアには「上医は国を医し、中医は人を医し、下医は病を医す」という語があります。しかし、地球 (Earth) を癒そうといった発想は、類例を見ません。

昌益は、「天地」という語を「転定」に代えるべきだと唱えました。「天地」という上下二分的な表現が、地球の循環性やつながりを見えにくくさせているからです。

「転」は循環する大気、「定」は還流する大海と安定した地殻。つまり、大気圏・水圏・岩石圏からなる地球です。こうした地球の捉え方自体が、すでに当時として独創的なものですが、さらにこの「転定」の間を一種の生命エネルギー（「活真の気」）が循環しているとするのは、地球自体を生きている生命と考えるガイア理論を先どりしています。

ガイア理論では、地球の大気・海洋・地殻の現象と生物の相互作用によって、生命が生存しやすい地球の環境が自己調整されると見ます。

この地球と生物の相互作用を、昌益は「直耕」と名づけました。地球（転定）が万物を生成するのが地球の「直耕」、人間が田畑を耕し穀物を育てるのが人間の「直耕」、動植物の食物連鎖も「直耕」。生物圏のすべての存在が、「直耕」し合っているのです。

農業をたんに農産物の生産を目的とするような考えは、言ってみれば「下農」。6次産業といっても、人間（経済）中心の「中農」。「上農」は、生きている生命である地球自体を癒す。つまり、いのちのつながりを耕すのです。

大気を仰いでみても、星雲・太陽・星・月以外には、これといった形象がない。これは活真の気だからである。大海を見わたしてみても、波しぶき以外には、これといった形象がない。これは「活真の気」だからである。大地を掘って観察してみても、これといった形象がない。これは「活真の気」だからである。これは大気と大海と大地に働いている「活真の気」が、相互作用しながら様々な気となって、大気から大海へ、大地において、大地から大気へと、「通」（鉛直下向き）→「横」（水平）→「逆」（鉛直上向き）…と循環しているのであり、そこにはよこしまで汚れた気は一点もない。そのため清浄で、目をさえぎらないのである。（『稿本 自然真営道』）

生物も、「活真の気」の循環の方向性によって、人間（「通」）・動物（「横」）・植物（「逆」）の三つに大きく分類されます。大気・海洋・地殻とそこに生息するする多様な生物の形象の中に、目に見えない「活真の気」が環流している。それが、いのちのつながりなのです。

昌益と同じく北東北で活躍した書芸家、造形家の宇山博明（1913-97）は、書を造形とし、自分にとって書芸とは、「命を書く、自分を書く、今を書くこと」と述べました。

わたしの造形は、作るのではない。いのちそのものが形になるのだ。見えないいのちが見えるいのちに転化する。これがわたしの造形なのだ。

いのちのつながりを耕すとは、見えない生命の真実（「活真」）を「見えるいのちに転化する」ことだとも言えます。

人間はいのちのつながりの中の一存在にすぎませんが、しかし「通」気を受けて生まれた人間には、見えない生命の真実を精妙に感知する感覚器官が備わっています。たとえば、耳と口について、こう言っています（『稿本 自然真営道』）。

大気・大地、人、鳥・獣・虫・魚、木・草のすべてが音を響かせている。人間はそれを聞いて、その意味を知らないことがない。これは耳が本来自然に備えている道理による。

大気の働きは、生物を通して表れるが、微妙で詳細な言語は人の口から、粗略な言語は万物から発される。…人の顔は、いつもいつもこの世界を感覚して、その口によって微妙詳細な言語を発す。

しかし、「直耕」を忘れた人間は、いのちの耕しとしての“農”を支配構造の核心に取り込むことで、清浄な「活真の気」の流れを汚し、みずからの精妙な感覚器官を錆びつかせてしまいました。

そのような、いのちのつながりの塞がりに鈍感になった社会（「法世」）は 3 万年前に始まったと、昌益は言います。清浄ないのちのつながりの世界（「自然の世」、「活真の世」）の回復が絶望にも感じられるほど、気の遠くなるような過去。

しかし、3 万年かけてできた社会も、人間が作ったものなので、いつかは必ず改めることができるはずです。

五感全体を発揮して、いのちのつながりを精妙に感知し、とりわけ微妙詳細な人間の表現に耳を傾けること。

人間の男女の言語、笑ったり歌ったり、あるいは無言の響き、…呼びかけ、答え、歌い、物語り、笑い、泣き、叫び、戯れる言語の響き、…病人の悩み叫ぶ声の響き、…談話にこもる憂い悲しみの響き、…すべてその響き合いから、大気と大海の気のめぐり、万物の発生・成育・結実・収穫の吉凶、人倫の生死・貧富・幸福と不幸を知るのが、「自然」の「活真」の「営」みに徹することである。（『稿本 自然真営道』）

これが昌益が「自然真営道」という語に籠めた意味であり、ガイアとしての地球を癒す、Art としての“農”だったのです。